京都工芸繊維大学

氏　　名	かくだ　あきら **角田　暁治**
学位(専攻分野)	博　士（工学）
学位記番号	博乙第　189　号
学位授与の日付	平成 25 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	**村野藤吾の晩年の作品における設計の特質に関する研究**
審査委員	(主査)教授　石田潤一郎 教授　中川　理 教授　長坂　大 名誉教授　竹内次男

論文内容の要旨

村野藤吾（1892～1984）は 1920 年代後半から 1980 年代半ばまで活躍した建築家で、近現代の日本の建築界を代表する一人である。機能の合理性、あるいは構造と意匠との整合性を極度に重視した近代主義建築全盛期に、村野はヒューマニズムを標榜して独自の作風を確立し、文化勲章をはじめとする高い評価を得た。

本論文では、村野藤吾が 80 歳代から 90 歳を迎えた晩年に完成させた 3 作品の設計プロセスを分析したものである。これらはいずれも特命で依頼を受け、恵まれた条件の下、設計を進めた建築物である。そこには巨匠がその生涯をかけて作り上げたさまざまな手法が注ぎ込まれていて、村野作品の特質を追求するのにきわめてふさわしい対象である。これら 3 作品の設計図面は京都工芸繊維大学美術工芸資料館にその大多数が収蔵されており、また施主、施工者側の資料も比較的豊富である。これらを資料として、村野の建築作品がどのようなスタディの過程を経て具体的な設計手法として実現しているのかを明らかにした。その上で際だった特質を有する設計がどのような思考過程と思考形式より生み出されてきたのかを考察した。

第 1 章では、西山記念会館（1975）の設計図面 440 点を検証し、設計図面の制作時期や検討案の変遷を明らかにした。この作品では実施案決定に至までに村野藤吾は 6 案を提示し、起工後も細部を検討しつづけていたことが判る。初期案では創業者のモニュメントとしての位置づけであり、ホールや創業者の記念室といった諸機能を建物中央部に配置し、階段等のコアを 3 つの頂部に配置するという三角形の明快な平面計画であった。構造的にも材料の特性に応じて鉄筋コンクリート構造と鉄骨構造が使い分けられ､3 つのコアが垂直に屹立する記念碑的表現を有していた。しかし、途中で施主側の要請が一般の利用を重視する方向に転換し、会館機能が中心になった。この変化は大ホールが中心に置かれるという平面上の変貌をもたらすとともに、外観でも中央部上部で三方コアが柔らかくつながった門型のイメージへと変化した。そこで特に注目すべきは、外壁曲面の凹凸形状が隣接する部分同士で連続するという着想が生まれ、その形態構成に合わせて素材を変化させていく経過である。その分析をとおして、外的要請を受けて「部分」のデザインが変更され､それらが全体構成にフィードバックされる過程での手法的展開を明らかにできた。

第 2 章では、松寿荘（1979）の設計図面 342 点を分析し、各図の制作時期や案の変遷を明らかにした。その上で、制作時期が連続する図面間において認められる変更箇所(平面 153 ヶ所、立面 114 ヶ所)を抽出することで、この作品の設計において力点が置かれた部分を明らかにし、それが

どのような空間効果を生み出しているのかを検証した。あわせて、施主の出光興産所蔵資料、施工者の鹿島建設の工事記録を精査した。

これによって以下のことが判明した。松寿荘の設計では、平面構成が先行して決定され、外観表現はそれを基にして検討された。平面は、1 階は 10 案、2 階は 5 案が提示されている。変更の内容を追うと、洋風のレセプションホールや食堂、和風の大広間などの主要室自体の設計とともに、それらをつなぐ接続部分の空間の検討に力が注がれ、シークエンスの展開に眼目があった。また、それらの各室の庭側の境界面も、案の進行とともに複雑化し、内部空間と庭の関係について検討を繰り返していた。外観の設計では 14 案が作成されている。その変更過程を追うと、特に屋根の表現の目的が明確になる。たとえば平屋建て部分と二層部分の断面的なヴォリュームの差を違和感なく連続させるために曲面が用いられ、その形状の追求に多大の努力が払われる。また平面の微妙な変化が屋根の各部分形状の変化を呼び起こし、それがさらに隣接する部分同士にも分節や分離といった変形を生んでいる。

第 3 章では、谷村美術館（1983）を対象として設計図面 92 点を分析した。村野の最晩年の作品であるこの建築は、事務所のスタッフを介さずに村野が単独で仕事を進めた。村野が施工者と直接やり取りを行ったため、打合せに用いられた図面には村野による大量の指示が書き込まれている。これらの指示項目を抽出し分類することで、この建築において村野が重視していた問題を明らかにした。なかでも、内外にわたって曲面が多用され、また外装では極度に粗面のスタッコ仕上げが採用されるという特徴的な形状が決定される過程を明確にできた。すなわち、仏像展示にふさわしい採光、および室間の視線の誘導、シークエンスの展開が設計意図の核心であったことを確認した。そして、自然採光と人工照明とをバランスさせるためのスリット状開口と内壁の膨らみの形状を着工後にも変更したことが、この建築の形態の複雑さをもたらしたことを明らかにした。

第 4 章では、上記 3 作品での村野藤吾の設計手法を「敷地や機能との応答と形態表現」「内部空間の構成と外観表現」「構造体と形態表現」の 3 つの視点から横断的に考察し、結章において、全体を総括した。

論文審査の結果の要旨

すぐれた建築作品がどのようにして設計されていったのか、その過程を知ることは建築学の永遠のテーマである。しかし多くの場合、そうした「創作の現場」は容易にうかがい知れないものであり、そもそも設計者自身でさえ完全には意識化しがたい領域である。

村野藤吾は丹下健三と並んで 20 世紀日本の建築界を代表する建築家であり、時流を超越した華麗な作風で知られる。本論文は魔術的とさえ形容された村野藤吾の造形手法の特質を、設計の過程を明確化することで解き明かそうとするものである。村野藤吾の設計図面はそのほとんどが本学美術工芸資料館に寄贈されている。この資料を駆使することによって、創作の現場に迫る難事を果たした。本論文が目指したことは大きく 2 つに分けられる。1 つは設計に当たって建築家に課せられていた与条件を明るみに出すことで、設計のプロセスを客観化することである。外的な条件の解明を突き詰めることで、村野作品の独自性をもたらしている建築家の意図を浮かび上がらせることを第 2 の目的としている。

申請者が考察の対象としたのは最晩年 10 年間の代表作である 3 作品（西山記念会館・松寿荘・

谷村美術館）である。村野藤吾は晩年に近づくと手法はいよいよ奔放になり、斬新な造形が世を驚かせつづけた。そのためその造形の論理的な理解は避けられてきた観がある。しかし、上記 3 作品はいずれも草案や変更案を含む厖大な図面が残されていた。申請者はまずその整理校訂を進めて、村野藤吾の模索の軌跡を逐一追跡した。一方で、クライアントや施工業者に残る施工図、工事記録を精査し、さらには当時の所員や建設会社の現場担当者への聞き取りをおこなっている。この緻密な作業を積み重ねることで、微細な変更までもその理由を突き止めることに成功した。これを可能にしたのは申請者自身実作者であり、図面の意味するところを的確に読み取る能力を備えていたからである。

このようにして施主からの機能的な要請やコスト上の問題、あるいは施工技術上の課題といった外的な条件による設計の検討過程が明確になったことで、あらためて村野藤吾が彼自身の造形的提案をどこでどのように押し進めたかが浮き彫りにされている。従来、感覚的にその表現効果のみが認識されてきた村野作品の造形について、その意図を客観的・論理的に把握する方法論を示したことは、建築意匠論の領域にとってきわめて大きな貢献である。

本論文の基礎となっている学術論文は、レフェリー制度の確立した雑誌に掲載されたものである。5 編いずれも申請者が筆頭著者あるいは単著である。

(1)角田暁治、福原和則、竹内次男：「西山記念会館における村野藤吾の設計過程に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』第 73 巻第 627 号、1147～1154 頁(2008 年)。

(2)角田暁治、福原和則、石田潤一郎：「平面の検討過程から見る松寿荘の特質について―松寿荘における村野藤吾の設計過程に関する研究　その 1―」『日本建築学会計画系論文集』第 77 巻 679 号、2181～2189 頁(2012 年)。

(3)角田暁治、福原和則、石田潤一郎：「立面の検討過程から見る松寿荘の特質について―松寿荘における村野藤吾の設計過程に関する研究　その 2―」『日本建築学会計画系論文集』第 78 巻 692 号、印刷中(2013 年 10 月刊行)。

(4)角田暁治：「谷村美術館における村野藤吾の設計プロセスと空間表現」『ドコモモ・ジャパン技術専門委員会研究発表会論文集』、184～189 頁（2008 年）。

(5)KAKUDA, Akira：A Study on the Design Features Characterizing the Later Three Works by Togo Murano, *International Conference on East Asian Architectural Culture 2012, Conference Proceedings*, Memory Stick, not paged, 14p, p.28(Conference Abstract) (2012).